



絵画の持つ平面性は面白い  
情報をどうセットするか  
編集し構成し演出するか  
平面にはプラン性がある  
素晴らしい

みえるものはみえないものに触っている  
感じられるものは感じられないものに触っている  
といった人がいる  
触っているところを大事にしたい



## 第88回独立展 予告!

2021年10月13日(水)-10月25日(月)

国立新美術館  
搬入日／9月30日(木)・10月1日(金)

詳しくは独立展ホームページまで！ ▶ <http://www.dokuritsuten.com>



## 独立ノート第9号

発行日／2020年10月1日

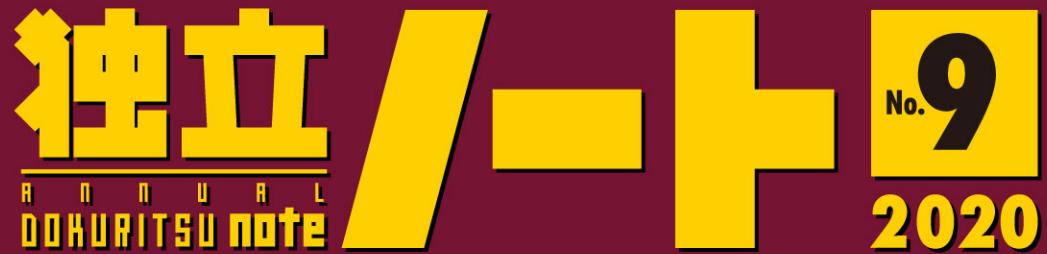
発行者／独立美術協会

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-13-8-507  
Tel.03-3490-5881 Fax.03-6420-0026  
E-mail.[dokuritsu@ceres.ocn.ne.jp](mailto:dokuritsu@ceres.ocn.ne.jp)  
URL.<http://www.dokuritsuten.com>

印刷／エーワンネットワーク・デザイン／八武崎勢津美

### —編集後記—

パンデミック宣言以降、アラートやクラスターなど耳慣れなかった用語も、マスク着用・ソーシャルディスタンスの日常となる中、編集メンバーは、情報を繋いで行きたいという一念で奮闘しました。来年度の独立展へと向かう一端として、継続する力と、また新たな出会いが待っていることを願っています。



- 独立レジェンド／神田日勝
- キーパーソン／今井信吾が語る
- アトリエ探偵団／花澤洋太





## 独立美術協会小史

**【誕生－初期】(1930－1959)** 1930年11月1日、清水登之(43歳)、鈴木保徳(39歳)、川口軌外(38歳)、小島善太郎(38歳)、児島善三郎(37歳)、中山巍(37歳)、鈴木亜夫(36歳)、里見勝蔵(35歳)、高畠達四郎(35歳)、林重義(34歳)、伊藤廉(32歳)、林武(32歳)、福沢一郎(32歳)、三岸好太郎(28歳)という14名の気鋭の画家たちが独立美術協会を設立し、翌年1月には東京府美術館で「第1回独立展」を開催した。

初期段階で野口弥太郎、須田國太郎、小林和作、海老原喜之助、鳥海青児らが会員として迎えられる。第1回展は3,058点、第2回展4,853点、第3回展では5,000点を超える搬入点数があったと記録されており、他の団体を超える「熱狂的な支持」を得ていたことが分かる。この期に独立は近代史に輝く画家集団として確固たる地位を築き、「独立展」は俳句の「季語」になった。

**【中期】(1960－1984)** 現代の洋画壇でも中心的な活躍を続けている会員が、この頃に新会員となって注目を集め始めた。画壇の芥川賞といわれた安井賞展には、独立所属の画家が多く入選・受賞した。その他昭和会展、安田火災美術財団奨励賞展など多くのコンクールや芸術賞で受賞してきた。また文化庁芸術家在外研修員として選出された画家も多く、活躍が続く。

**【現在】(1985－)** 独立展以外の活動では、この期も様々なコンクールで受賞したり、文化庁芸術家在外研修員に選ばれる独立所属画家の輩出が続く。また、毎年6月を中心に銀座界隈の画廊で独立展出品者の展覧会が頻繁に開催され、美術界の話題になっている。

一方独立展内部の作品には、抽象作品だけでなく具象作品にも半立体的な作品が現れたり、写実的な傾向の作品やコンピュータを利用した作品も増えて表現がより多様化して行った。

独立展は、こうした新しく生まれようとする優れた才能には時を選ばず評価してきた。また「審査することは、同時に審査されること」という自覚を持って運営し、現在にいたる。

批評家・学芸員・会員によるギャラリートークも好評を博している。

## 独立ノート第9号

発刊にあたり

このコロナはやっかいだ。大事なものを奪っていく。弱者は弾かれる。世界中の国々を試し、人々を試す。“独立”もしっかりと試され、時と共に内外の激動に合わせ、そのエネルギーはうねり、正反対を繰り返し、ボンヤリとした不安と不満は人間的な表情を露わにし、ベクトルの方向性を示しました。コロナ以前コロナ以後、どういう風に“独立”は変化するか楽しみである。改めて表現について思考を深め、絆を強くして、今後への新しいエネルギーしたい。

この難しい期間、独立ノートの刊行を持続していく良かった。第9号の編集メンバーに感謝します。

事務所委員 吉武研司

### 目次

❖ 独立美術協会小史	表紙裏
❖ 独立ノート第9号発刊にあたり	1
❖ 独立レジェンド／神田日勝	2
❖ 独立キーパーソン／今井信吾が語る	4
❖ アトリエ探偵団／花澤洋太	6
❖ つぶやき生の声！	8
❖ 特集！独立賞のころ	10
❖ 独立 2020 ドキュメント	12
❖ 独立人－ひとりたつひと－／吉田宏太郎	13
❖ 第88回独立展予告	裏表紙

2020

No.  
9

制作：独立ノート編集室

阿部栄一 井上達也 加藤啓治 北島治樹 関口聖子

津川めぐ美 佃彰一郎 松原潤

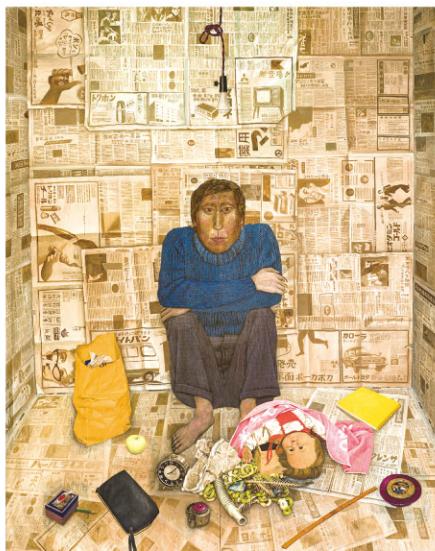
協力：キャラクター制作/斎藤将 画像提供/千葉光

表紙：神田日勝「馬（絶筆）」183×204cm 1970年 神田日勝記念美術館収蔵

# 農民である 画家である

1937年、東京練馬に生まれる。8歳のとき、東京大空襲から逃れて一家で北海道へ疎開、十勝管内鹿追町に入植する。過酷な大自然と向き合う開拓は、困難を極めて脱落者が多かったが、艱難を乗り越えて神田一家は鹿追に定着した。中学校を卒業した日勝は、農業を継ぎ、地域にも溶け込んで、優しく快活な青年として成長する。幼少より絵に興味があり、兄・神田一明（のちに東京藝術大学へ進学）の影響もあって油絵を始める。19歳で公募展（平原社美術協会）に初入選・受賞し、全道展では北海道知事賞受賞など地元にて実績を積んで行った。

作品はベニヤ板にペインティングナイフで刻み



「室内風景」  
227.3×181.8cm  
1970年  
北海道立  
近代美術館収蔵

## 神田日勝

かんだ にっしょう  
Nissho KANDA



北海道十勝に開拓農民として生き、絵と農業に生涯の情熱を注いで夭折した画家である。独立展・独立選抜展に於いても、その豊かな作品を展開した。

つけるように描いたマチエールが、日勝作品を貫く特徴となる。

1962年には、最愛の伴侶（高野ミサ子）を得てのち、一男一女が誕生している。

1964年、東京オリンピックの年に独立展初入選。翌年の第33回独立展では2点入選を果たして新人室陳列となったことは大きな勵みになったことだろう。その後も努力を重ね、物の本質に迫る独特な世界を創り出していった。厳しい労働と画業を両立するため、どうやって絵を描く時間を作っていたのだろうかと、想像に余りある。

1970年8月、体の不調が続き、25日、腎盂炎による敗血症で永眠。32歳8か月の生涯であった。当時、独立展では日勝の遺作が展示され、作品の感動が、詩人の故・宗左近氏の評論で話題になった。北海道の風土に培われた作品群は、戦後の高度成長期の矛盾や弊害などとも呼応



「ゴミ箱」  
121×184cm  
1961年  
神田日勝記念美術館収蔵

して、画家の誇りと苦悩、生きることに対する誠実な問いかけが、画面上に、今もなお熱を孕んでいることに圧倒

される。独立展では受賞には及んでいなかったが、これからという時の早逝が惜しまれてならない。今年の没後50周年を記念した回顧展は、東京会場（ステーションギャラリー）では緊急事態宣言による開幕延期・会期短縮となった。しかし、神田日勝の作品は時空を超えて多くの人々を惹きつけ、愛されている。



「死馬」148×184.2cm 1965年  
北海道立近代美術館収蔵



「飯場の風景」138.2×183.5cm 1963年  
神田日勝記念美術館収蔵

### 〈随想〉 原野に生きる

神田日勝

北方の原野十勝が、真にその個性を発揮する季節といえば、今頃かもしれない。なまり色の憂鬱な空が西から東へゆったりとした動きを見せ、粉雪を躍らせる狩猟おろしが、一日中カラ松の林をさわがせる。ホワイトグレー一色に凍ていた野づらは、ゾッとするほど美しい。このさむざむとした、だだっびろい空間が、十勝農民の生きる場所だ。41年十勝の秋は実らずに終わってしまった。冷害という言葉がさまざまな暗い意味をもって農民をふさぎこませてしまう。根っこのような、いかつい手の表情には、生活の苦闘を如実に物語るものがある。冬は農民が野良から解放され、炉端にうずくまりながら、わが人生をあれこれ思考する季節だ。鈍重なまでにたくましく、質実な十勝の農民をはぐくむものは、荒けずりな北方の風土かも知れない。十勝の冬はさびしい。

<1967年1月6日 十勝日報掲載>

### “独自のリアリズムの世界を模索”

神田日勝記念美術館 館長 小林 潤

十勝に開拓民として生き、画家としてベニヤ板に生命の痕跡を残した日勝。戦後の混乱の時代、未だ鬱蒼と生い茂る原始林の痕跡が残る過酷な労働の日常には油彩画を学ぶ術もなく、独学でひたすら独自のリアリズムの世界を模索しました。作品搬出時は、農耕馬に曳かせる荷馬車に積み、泥濘を超えて数キロ先の郵便物取次所を経て独立展へ。

日勝は32年間の短い生涯にただ一度だけ上京が叶い、乾いた喉を潤すように第8回独立選抜展に身を投じました。中央画壇の潮流に触れる得難い時間を過ごし、以降さらに情熱的な作品が生まれていきます。「結局、どういう作品が生れるかは、どう云う生き方をするかにかかっている」と自らを律しつつ日勝は生き、描き続けました。

### ●神田日勝記念美術館

日勝と共に感する地域の方々が原動力となり17年の準備期間を経て1993年に開館。

〒081-0222 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2  
Tel.0156-66-1555 http://kandanisho.com



### ●北海道立近代美術館

〒060-0001 北海道札幌市中央区北1条西17丁目2-1  
Tel.011-644-6881  
<http://www.dokyo1.pref.hokkaido.lg.jp/hk/knb/index.htm>

# 今井信吾が語る

いまい しんご

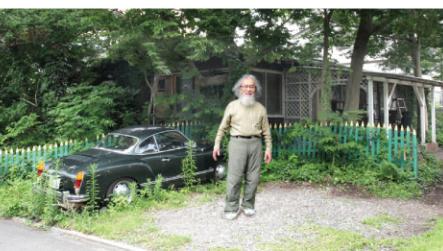
Shingo IMAI



1938 兵庫県姫路市に生まれる  
1963 東京芸術大学油絵科卒業(林武教室)  
1965 東京芸術大学大学院修了(山口薰教室)  
1967 第35回独立展・独立賞受賞  
1968 第36回独立展・会員推举  
1970 多摩美術大学講師、後に助教授、教授  
1976 第11回昭和会賞・昭和会賞受賞  
1976~77 文化庁派遣芸術家在外研修として渡欧  
1994 池田20世紀美術館「今井信吾の世界展」  
2008 多摩美術大学美術館「退職記念展」  
2013 姫路市芸術文化大賞受賞  
現在 独立美術協会会員、多摩美術大学名誉教授

## 幼少期・絵画への道

私が三歳の時に生母とは死別しているが、女学校の頃に丹波の山奥でバイオリンを習い、油絵を描いていたことをずっと後に知った。小学生の時、タンスからジンクホワイト(油彩用・文房堂?)が一本出てきて、子ども心にこの白をもとに赤と黄色、青を買えば油絵が描けるはずと考えた。その頃は毎日画塾で夜まで描いていた。生涯を通じて一番絵を描いていたかもしれない。一本のジンクホワイトが絵画を志す道を後押ししてくれたとすれば、母親の遺品として奇跡のような、当然のよう…。絵の道に進むことを決めた年(1955年)に安井曾太郎が亡くなっている。翌年の春に展覧会があり、ファンだったので姫路から夜行列車で見に行つたが、安井のデスマスクを描いたデッサンが展示されていた。作者、林武とあった。東京藝大に合格して、念願だった林武先生には学部4年の時に指導を受ける。先生は空前絶後!



齋藤研

今井信吾

神通力を感じさせるその存在感にはしびれた。学生というよりファンとして近くにいることができ幸いだった。大学院では山口薰教室の第1回生。憧れの先生だった。当時の藝大では山口薰になりたいという学生がいっぱいいたような時代だった。奈良の古美術旅行にご一緒できたことが忘れられない。温かく優しい先生だったが、これだけは譲れないという、岩のようなものを持っている人でもあった。二人の先生からは一度も絵を褒められたことはないが、君はまだいかほどのものでもない、という励ましたったと痛いように思われる。

## 親友・齋藤研

藝大大学院終了後、副手になった。二年目から齋藤研と同じ研究室で一緒に制作した。彼は大画面にはりついで後ろに下がることなく、強烈な色彩のタッチでグイグイと描いていく。休ま

ない。絵から遠ざかって思案している私には圧倒的な迫力だった。1966年、彼が独立賞・須田賞ダブル受賞の報告に部屋に入って来るなり、「信吾さんは一点、せいぜい悔しがってくれ」と言って出て行った。他にどんな言葉があっただろう。彼は副手を終えて数年、突然に今に繋がる細密な写実の絵に一変。大都会を一望する風景の迫力には驚かされた。後塵を拝しながら彼との付き合いについては「独立クロニクル(No.71・第84回独立展)」やその他でしばしば語っているが、特にこのクロニクルのものは是非読み返していただきたい。独立展の思い出がいっぱいです。(齋藤研、2020年1月逝去)

## 家族・独立展

1983年の第51回独立展に『音のない風景 永代橋』を出品しましたが、モデルになっている次女・麗によると音のない感じがよく出ているという。ちょうどこんな感じらしい。『宿題の絵日記帳』の中にも書いてあります。この絵を描く時には梯子をもって車に上って橋を写生・撮影するなど、しっかり取材したものだった。麗の耳が聞こえない我が家が家の痛みが風化するには300年はかかるだろうなどという思いと、「永代」という文字が重なって思え、どうしてもこの橋を描かねばならないという気持ちだった。香月・麗が生れてからは、私のモチーフはそちらの方にぐっと傾いていき、孫たちの時代になってもそのまま自然に引き継いで今に至っている。麗はその後、画家となり、目覚ましい展開をみせていて私もタジタジである。独立展を選んだのは特別に何かねらいがあったわけではなく、はずみで事故にあったような…運命のようなもの。今の出品者も気がついたら目の前に独立と出会っていたという感じではないでしょうか。一旦出会った以上、生涯全うするしかない。独立の人達とは気持ちが合い、私は仲間になることの素晴らしさを何度も感じている。独立は私の人生そのものです。

「麗二歳」1984年  
ドライポイント

「迷宮・千手解体」200号 2004年



「音のない風景…永代橋」200号 1983年

## 花澤洋太

はなざわ ようた  
Yota HANAZAWA

水田と緑の丘が織り成す穏やかな田園風景の中に在る花澤会員のアトリエ。古い農家を奥様とふたりでリフォームされたもので、外壁や梁などは上手に再利用されている。

\*今回は新型コロナ感染症予防のため、リモートにて取材。



東京藝術大学 ラグビー部OB会  
船越杯争奪戦(学習院グランド)



「心の障壁」F150 1991年  
東京藝術大学卒業制作  
大学買上げ賞・大橋賞受賞作



アトリエ外観



探 「心の障壁Ⅰ」F130 2000年  
第68回独立展・独立賞受賞作

探 F200 2020年 新作



探 制作初期段階は庭で制作



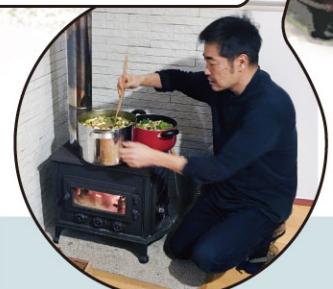
制作道具、木工スペース



探 何かと便利な薪ストーブ

花澤洋太 はなざわ ようた

1967 東京都生まれ  
1991 東京藝術大学美術学部絵画科油画卒業(卒業制作大学買上げ賞、大橋賞)  
1993 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了  
1996 東京藝術大学大学院美術研究科博士課程単位取得満期退学  
2000 第68回独立展/独立賞受賞  
2001 第69回独立展/会员推举  
2015 「公募団体ベストセレクション美術2015」東京都美術館  
2016 「都美セレクション 新锐美術家 2016」東京都美術館  
現在 独立美術会員、日本美術家連盟会員、東京学芸大学准教授



# つぶやき生の声

北関東独立展でのアドバイス。絵の方向性を変え試行錯誤を続けています。  
素晴らしい出会いに感謝!

— 根岸百々代 茨城 —

日々心掛けていること「大きな壁にぶつかったとき、大切な事はただ一つ。  
壁の前でちゃんとウロウロしていること」 — 阪本聰 和歌山 —

創作環境の中でペンで描く事に苦労した。選抜展で賞をいただき感謝。  
この方向で頑張ります。 — 山崎吉広 静岡 —

コロナ自粛で描く時間はあるのにどこか上の空。私の動力は仲間との会話や息遣い  
美術館に佇む日常が大切だと気付いた。 — 斎藤悦子 神奈川 —

どうやったらいい作品が描けるんだろう…。  
試行錯誤しながらただ描き続けるだけです。 — 宮澤悟 岡山 —

春季選抜展は思いっ切り描きました。コロナ騒ぎが終息、ワクチンも出来、  
元の生活に戻ればと願っています。 — 小林典子 神奈川 —

春到来と共に絵の制作から離れ、庭の仕事に専念した。  
どこか懐かしい土の匂いに癒される。 — 村本千洲子 北海道 —

小さな幸せと夢と希望を持ちポジティブに生きるホームレスを描いて来た。  
12連作後マイホーム建設完でテーマ終了です。 — 日置偉之 愛知 —

これから書道のような表現を追求して行こう。  
そして心の声を大胆に描きたい。 — 篠崎純子 栃木 —

今までに頂いた言葉<自分を貫く・何を伝えるか原点に戻る・  
心を込めて・楽しんで>どの言葉も凄い! — 黒沢典子 東京 —

コロナの為、選抜展の鑑賞出来ず四国展も中止。気持ちを入れ替えて頑張ります。  
全国の皆様頑張りましょう! — 町川邦彦 香川 —

グループ展、地方展は中止!秋の本展は無事開催されますように!そうだ!  
今年も作品に恐竜を描き込もう!マスクをつけて!! — 廣瀬淳志 高知 —

絵を描くという行為、その意味性はいつまでも分からぬ。  
描く事でそれに近付く他はない。 — 蒲生英治 茨城 —

造形の眼が栄養を望んでいる。何を求めているのか。  
丁寧に、大胆に、想いを追い、また歩み続けたい。 — 熱海正武 宮城 —

人肌を這う一瞬の光。覆うビニールで透過された予期せぬ歪みが面白い。  
一瞬の煌めきを描写していきたい。 — 宮谷順子 広島 —

今年はコロナ禍の影響で、インタビューではなく往復はがきでの  
「つぶやき」に協力をいただきました。厳しい状況にある今、  
全国から絵への想い、次の制作につながる言葉が返ってきました。

「閉ざされた日常」の中、じっくりと絵に向き合う。描いては消しまた描く事を繰り返すうち  
絡み合ったイメージがほぐれてきた… — 新村文祥 静岡 —

アルバイト探しとコロナ。焦らず大作にじっくり向き合います。制作時間が増えたぞ! — 小川佳奈子 千葉 —

親の介護で単身赴任4年目。秋、父を見送った。「今」を受け入れ自分の立ち位置を見失わず  
記憶に留めたい。 — 安藤和也 北海道 —

巣篭る日々、不穏な反面ささやかな幸運を感じます。体力、知力の衰えを実感するが、  
絵については想いが膨らみます。これからだー♪ — 斎藤悠紀子 埼玉 —

・会員になって益々向上心・地方でも裾野を拓げる独立展  
・選抜展熱気ムンムンコロナでも — 伊藤裕貴 福井 —

この世界は正解もゴールもないと思っていた。  
熱いご講評を頂いて、正解はあると思えて来ました。 — 後藤玉枝 京都 —

「独立は難しいぞ。まあ頑張りなさい」林敬二先生のお言葉。「難しい」の裏には何が!  
今後も真摯に取り組みたい。 — 池田宣弘 北海道 —

ど田舎に住む私にしか出来ない郷土をテーマにした半立体作品を発表。  
評価して頂いたことが私の礎となっています。 — 高増千晶 長崎 —

絵を描けるのは幸せなこと。でも、時間、体力、気力を使って疲労困憊。  
ドリンク飲みつつ精進いたします。 — 黒田ちづ子 香川 —

選抜展の受賞で皆さんに会えるのを楽しみにしていたのですが、  
残念でした。元の日常生活に戻る事を願っています。 — 林久人 宮崎 —

もっと輝きたい!前進あるのみ!と念じて制作しています。 — 岡林まち子 三重 —

初の独立展の時、大迫力の作品群、批評会の熱気に圧倒され、また来たいと思った。  
日常を乗り越える為の大切な軸です。 — 佐々木ゆか 北海道 —

コロナの為究展の中止は残念。ステイホームで描く事に専念する。  
外だけではなく内に向かう姿勢の重要性を再認識した — 河合規仁 山形 —

家のリホームで描く時間が減少。恩師坂本善三先生の言葉「絵は一日描かなければならぬ」  
取り戻すのに2日、倍返しからね! — 上村隆一 熊本 —



独立展を担う中堅会員に、独立賞の思い出を語っていただきました。

## —「模索の時代」—



「游能暮呂(onokoro)-95105」1995年

●略歴●

- 1975 東京芸術大学大学院美術研究科油画研究室修了/大橋賞受賞
- 1995 第63回独立展/独立賞受賞(翌年、会員推举)
- 2002 文化庁派遣芸術家在外研修員(フランス)  
「能と現代美術のコラボレーション」ヨーロッパ公演  
(平成14年度文化庁国際芸術交流支援事業)
- 2005~ 東京学芸大学非常勤講師
- 2011~ 同大学特任教授
- 2019 第62回埼玉文化賞「芸術部門」

## 岡田 忠明

1975年第43回独立展が初出品、丁度20年経た頃、独立賞(1995年第63回独立展)を頂いた。自分の絵画を真剣に模索していた時代であり、その結果が出始めたころのことだった。

作家には、「若くして自分の世界を見つけ自己を確立する作家、時間のかかる作家とタイプがあるかと思う。いろいろ経験・研究して、画力、出身環境などを超えて、初めて眞の自己の絵画が確立していくのは70歳を超えてからだよ」と、先輩の先生から教えて頂いたことがある。「体力、病気

などと闘いながらの制作になるが、本物はこれからですよ」と!  
なるほどと思わざるを得ない。そんなことが心に響く年齢となった。



## —「北海道に独立展を」—



「Show-up 奏(partII)」1985年

●略歴●

- 福岡県生まれ  
北海道秀作美術展
- 1984 第52回独立展/独立賞受賞('86)  
現代美術選抜展(文化庁主催)
- 1987 韓日交流美術展(ワル)
- 1992 アイルランド国際交流版画展(ダブリン)
- 1997 済州島国際美術交流大展/尹氏賞受賞
- 2001 Asian Art Now/グラントリ受賞(ラスベガス)
- 2011 札幌市芸術の森美術館/竹岡羊子展  
(北海道新聞社主催)  
第40回札幌芸術賞受賞

## 竹岡 羊子

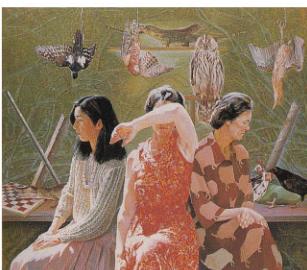
人間にも旬というのがあるとすれば、独立賞をいただきましたところが私の旬のように思います。

幸運にも独立52回展・54回展の2回の独立賞と翌年の55回展で会員推举となりましたが、その喜びも束の間、事務所より「会員としての初仕事は独立展を北海道で開催するように」という厳命を受けました(驚きました)。しかし…。55回を数える独立展が一度も開催できない理由の一つに津軽海峡があります。次々の難問題に心を痛めていた折も折、世紀の大事業と称えられた青函トンネルが開通したのです。1988年のこと。

「北海道に独立展を」と与えられたテーマに全道広域の出品者一同の結束の凄さに、改めて地方展の意義の深さを知りました。盛沢山の特大ニュース!「一際、思い出深い独立賞のころ」でした。



## —「独立賞の落ちこぼれ」—



「上越鳥話-II」1988年

●略歴●

- 1945 佐賀県佐賀市生まれ
- 1970 東京芸術大学大学院油画専攻修了
- 1972 東京芸術大学大学院版画専攻修了  
第40回独立展/独立賞受賞
- 1985 胡の会展(銀座・若井画廊'86)
- 1988 現代美術選抜展(文化庁主催)
- 1989 安井賞展('90 '93 '95)
- 1991 21世紀への証言展(セントラル美術館)  
ジュヌ・バーグ展  
(日本橋オントワードギャラリー'95)
- 1993 「絵画の今日」JMA展(新宿・三越美術館'95 '97)
- 1996 個展(日本橋・三越 '03 '06 '11)
- 1997 独楽の会展(日本橋・高島屋 '01)  
EVOLUTION16(日本橋・高島屋 '12)

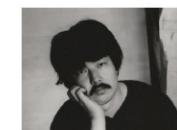


現在、私にとって200号の制作は、尺取虫が100メートル競歩をフィニッシュラインまでたどり着くと同じくらい、難儀である。ツクツクボウシの声が「バンジーキュウス」と聞こえてくるのである。  
精神は前傾姿勢の老人…嗚呼!

## 山田 修市

時の経つのは早いもので、最初の独立賞を受賞したのは35年近く前の事になってしまいました。今思うと、あの頃は独立展に出品する作品を毎年苦惱しながら制作していた事を思い出します。ともすれば緩みがちな気持ちを制作に向けていくために自分を追い込み、イメージを絞り出していた時代であり、唯々、無我夢中で走っていた中で独立展に育てもらったと思っています。

今は制作に時間をかけ、試行が成熟していくことを楽しみながら制作をしています。熱い気持ちが前面にでてくるように画面に向かっていたものが、段々と画面の内側に向かっていくようになってきて。ようやく少し自分の内に新しい制作の芽が出てきたように思います。



## 輝け原石！独立春季新人選抜展 2020

2020年3月25日(水) - 31日(火) in 東京都美術館



をとりました。

この開館日数の変更と感染予防から、例年と同様に各賞を選考することが困難なため、本年は「選抜展奨励賞」のみとし、選考の結果34名の優秀作品へ、選抜展奨励賞が授与されています。

全国から選抜された178名の意欲的な新作が会場を飾った「輝け原石！独立春季新人選抜展2020」展が、2020年3月25日より東京都美術館で開催されました。

しかし100年に一度といわれる新型ウイルスの蔓延に伴い、感染拡大防止策として公共施設の閉鎖措置がとられ、都美術館も東京都からの強い要請にこたえ休館となりました。熱意溢れる出品作品とその感動を、ひとりでも多くの方に届けたいとの願いは叶わず、選抜展の開催期間は、初日から3日間と短縮され、28日以降の4日間は中止の対応

## 第88回独立展 延期について

“芸術は楽しいだけの気晴らしではない。何事にも疑問を持ち、想像力と旺盛な実験的精神に満ち、矛盾を突き挑発することで、公共の言説に活気を与え、民主主義を政治的な無氣力感や全体主義への偏向から守る人々が芸術家である”と(ドイツの文化大臣・モニカ・グリュッターズ氏による)。まさに今年は芸術の価値、芸術家としてどう行動すべきかを考えさせられる特別の年でした。

今年は新型コロナウィルス感染の問題で、他の公募展が軒並み中止となり、独立もどうするかを迫られました(独立展は1945年に中止となった以外、毎年開催)。今回、一度は開催を決定しましたが、それは今年も開催して人々に創造の喜びを伝えたいという思いと、美術館が開館すれば、独立展も工夫して開催できるのではないかという判断です。しかしこロナ感染が激変、それに伴い開催への不安が増大して行き、これを重視して再検討となり、その結果、今年は開催を諦めて来年に延期となりました。一度決めた決定が覆りましたが、これは会員が出品者と独立展のことを思い、苦しんだ証であったと思います。

第88回独立展は2021年10月の開催となります。素晴らしい再会となるよう願ってやみません。

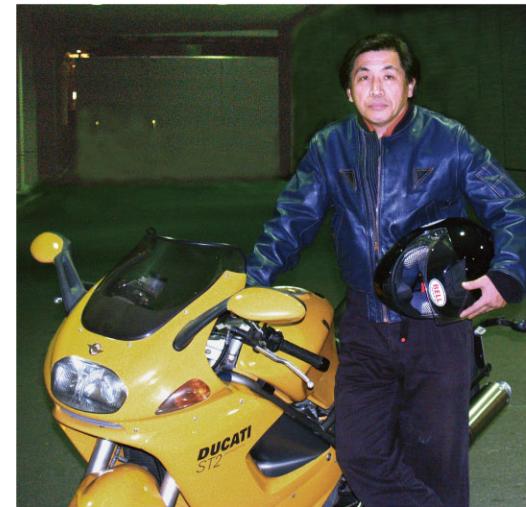


## 1 歴代バイクが記憶のフォルダ

アンフォルメルの壁画や土俗的なオブジェのあるアトリエで制作しています。このアトリエは父、吉田西緝(独立美術会員2000年没)の作業場であり夢を紡ぐ空間でした。私は、40年ほどの東京での生活の後、妻を亡くし母の介護で佐賀に帰りました。父が椅子を木で作るのを手伝ったり、遊びの中で絵を教えてくれたのが、今、私が平面と立体、絵皿などを表現手段にしている原点となっているようです。立体のグループparadigmを仲間と開催し、画家だけでなく、デザイナー、建築家との交流を楽しみ、絵皿は有田の窯元(会員の山下智樹さんのお世話)で焼いています。天地が無いこと、釉薬の変化と磁器の質感を面白く感じ、絵画、立体、磁器を交互に制作して、何時も新鮮に取り組めています。

作ることの楽しさで、仕事と趣味が漠然としていますが、純粋な趣味では現在、単車「スズキの750cc」と、「オフロードバイク」に乗っています。“あのバイクに乗っていたころ、映画の特撮用立体を作っていた”などと歴代バイクが、甘さや苦さの記憶のフォルダになっています。

(ポートレートのバイクは、ドゥカティST2、以前所有)



「水平線を見る人」レジン・金属

## 2 制作テーマのデジアビュ(既視感)

辛い体験から自身を守るためか、43年ぶりの佐賀が錯覚を起こさせているのか、オーバルコースを回っているようで、自身の感覚に興味が尽きません。思えば50年も前のこと、このアトリエに独立展に出品し始めた佐賀の若い画家たちが集まっていて、その中には現在会員の吉武研司さん・北島治樹さんもいました。当時、保守的な表現の土壤の中、新しい表現を求めて集まる画家たちのリーダーとして、父は大きい存在でした。帰郷と記憶がこの文の要旨となりましたが、振り切って前に進みたいと思います。



「デジアビュ 我が母、若き日に歸れ」  
200F 2019年



1955 佐賀県佐賀市に生まれる  
1979 東京造形大学造形学部  
美術学科絵画専攻卒業  
1994 文化庁現代美術選抜展  
2000 第68回独立展/独立賞受賞  
2001 第69回独立展/会員推挙  
2010 O美術館/自選展  
個展、グループ展  
(paradigmなど)多数



吉田西緝「船形A」130F 1968年  
独立賞(個人蔵)